金錢を贈ると云ふのも紳士社會には決してない。主人が召使に與へるか或はずつと身分の高い人が下の人に與へることが出來る。

西洋人に對しても日本人の如くせよ

西洋人間には前記の如く贈物にのし水引等の禮がないから、西洋人に贈物をする時には、そんな物はいらないと思つて、のし水引等を使はずに贈物をするのはよくない、何故だと云ふと、西洋人は日本人間の贈物の習慣を聞き又見もして、よく知つて居るから、若し西洋人に不體裁にして送ると、西洋人は輕蔑したと斯う取つて、交際上甚だ面白くない事がある。故に日本人は相手が何人であらうとも日本人間にする通りにして贈物をするがよい。

第七章　交際

交際と生活

世の中の圓滿なる進行は人間社會の圓滑なる交際に基くのであるから、高等社會の者は交際といふ事を人間生活の有一の大切な事として居る。歐洲紳士の生活費の一大部分は卽ち交際費である。ことに歐洲貴婦人の生活の如きは、交際生活と見てもよい位である。

知人

交際は先づ知人から始まる、知人とは未だ其の人の性質、境遇、身分その他の事を知悉しない人で、何處かで顔を知り合つた人、又はその後ちよい〳〵と顔を合すか、又は業務上で往復して居る人で

ある。此の如き人は單に知人と稱して、歐洲では友人とは云はない。日本では知人時代の人でも友達だと云ふが、歐洲人は決して知人を友達とは云はない。人に紹介する時にも知人である、親友であると確かに區別する。

友人

知人が進んで友人になるのである。始めに知り合つてから、相互に意氣相投じて、往復も屢〳〵繰返され、その間相互に性質、境遇身分等を十分よく知り合ふ、而して其の時にも矢張り相互に意氣相投じて居れば、其の時に始めて友人又は親友になるのである。親友になれば、歐洲の紳士は其の人に就いては自分の利害を考へない。

急に親しくせぬ事

交際に就て最も大切な事は、相互が段々と知り合つて、相互に性質を悉知すると云ふことである。急に親しい有樣をするのは、餘り善くない事である。故に一友人と知り合ても其の人と急に親しくなる樣に此方から差向けるのは甚不作法である。

親密を強ひざること

親しくするのは惡い事で無いけれども、相手との關係以上に此方から親密な程度を示すのは惡い、例へば日本の習慣では、一寸初めて會つた時にも、何卒懇意に願ひます、何れ其内伺ひますと斯う云ふのは一般社會の普通の事で有るが、西洋の高等社會の禮節としては善くない。假し相手が如何なる人で有るかを既によく知つて居る時でも、自分と其人との關係が未だ一面識の場合に歐洲の習慣では

訪問しますと云ふこと、懇意に願ふと云ふ事は云ふ事が出來ない。

心からといふ言葉

右に云ふ如く此方から親密を以て迫つて行くのは禮で無いから、從つて交際の日の未だ淺い中に言葉や又や手紙などに「心から」と云ふ言葉、例へば獨逸語で herzlich と云ふ言葉を餘り使ふのは善くない、殊に上の者に對して此の言葉を使ふのは善くない。

不必要なることを云はぬ事

親友として極めて懇意な間柄になつて居つても、相手の利益になり、又は相手が興味を引き起す樣な事ばかりに就いて常に談話を交換して居るべきで、親友に爲つた事からと思つて相手に何等の必要の無い、無關係の事を、ひよいと云ひ出すのは交際上善くない。

親友と金錢

未だ知人として交際して居る間は、金錢の事は一錢たりとても相互に決算し、且つ疑の起らぬ樣に明瞭に示すのが習慣であるが、親友と爲つてからは、もはや金錢のことに付き知人的にしては行かぬ。例へば車代とか、一寸した買ひ物代とか、然う云ふものは、相互に一つの懷だと思つて居る。最も高價な買物は相手との相談の上で定めるが、小さいことは、親友のことを自分のことと同じ樣にする。

親友の病氣の節

知人の病氣の時には見舞ひに行かなくてもよい。親友の病氣の時は頻繁に見舞ひに行く。若し親友中の親友が病氣の場合には、紳士

淑女は如何な多忙な時でも、必ず毎日見舞に行き病氣に付いて心配し、世話をし、病氣の全快の爲めに有りと有らゆる方法を講ずる。歐洲高等社會の者の親友間の友情の厚い事は實に非常なもので、予の懇意な歐洲の紳士で、現に東京に住して居る此の人の親友が病氣になつて、一時は隨分危險な程度に迄行つた。すると予の懇意な此の紳士の心配は實に非常なもので、一時は自分も病氣になつた樣な顏をして居つた、而して病人が全快した時に、自分も初めて氣が樂になつて、少し疲勞が出て、自分は他に保養に出かけたことがある。是れ等の事實を以て如何に歐洲紳士が親友に對して友誼が厚いかゞ解る。

日本の習慣には、友人が一寸四五日の旅行に立つ時にも停車場へ送迎するやうな事があるが、歐洲の禮節としては此の如き事は寧ろ愚な事で、紳士の却つて好まざる事である。親友を停車場に送るのは非常に長い旅行をする時のみだ。又親友でない、一寸した知人が送るのも寧ろ不作法である。日本で一寸した知人が大勢群を爲して停車場に送迎する樣な事は、時の無益な消費であり、又友誼上にも實際上にも何等の必要のない事であるから、宜しく歐洲の風に改めるがよい。

交際の劇變

紳士が一旦親しく交際を初めたら、中途で、何か特別の事情なしに變化はするものでない。然るに、日本人と交際するのは、多くは

一時的で、長く眞の親友として交際し得る人は甚だ少い、一時非常に親しく交際するかと思ふと、もはやぱたりと來なくなつて了ふ人がある、何か此方で失禮な事でもしたのかと陰ながら心配すると、別に然ういふ事ではなく、たゞ先方が急に何かで急がしくなつた爲めか何かで交際を止めて了ふのである。こういふ事は歐洲の高等社會の人はしない。一旦親友になつた以上は何か特別の事件が生じなければ交際を中絶する樣なことはない。若し萬一多忙で止むを得ぬ事があつて訪問が出來なければ、手紙をやつておき後に招待して謝するのが紳士である。

概して日本人との交際は始め急に親しくなり、後に急に遠くなつて了ふ、丁度西洋人とあべこべである。

歐洲紳士の交際は、自分の方の都合で止めるのは甚だ禮節を缺くことゝして居る。

人を僞く丁寧

歐洲の紳士は人をあざむく樣な丁寧な言葉と態度とは禮節として甚だ惡いことゝして居る。然るに、日本の紳士にあつて、先づ最初にうくる印象は非常に丁寧といふ事である、而して其の丁寧の精神がよく表情及び態度にあらはるゝ事である、卽ち言語と動作とにおいて極めて丁寧である。

併し段々交際して見ると、その丁寧の程度の如くに敬意をうけるのではない、それで日本紳士の丁寧なる態度は一の形式に過ぎないといふ事がわかる。言ひかへれば日本の紳士の丁寧は一の虛飾に過

ぎないのである。それだから歐洲の紳士は日本の紳士の恐るべき丁寧な態度にあざむかれる事が折々ある。勿論歐洲の紳士といへども中々丁寧である、併し心にない丁寧はしない、勿論多少虚飾な丁寧がないではないが、それは其の場面を綺麗にすごす爲めのみで、眞に其の人を敬する樣なうその丁寧はしない。

歐洲人が非常に眞に丁寧な心を表はす時には何かその人に對しての行爲に出るのである。只言葉と腰をかゞめる事による丁寧は歐洲の紳士はあまり好まない。

上の人に對して無暗に虚禮をするな、下の者に對して無禮であるなといふのが歐洲紳士の標準である。

宮中と一般社會

歐洲の紳士は場所が何處であらうと、決して人を僞くやうな虚禮をしない。

日本の紳士について最も驚くべきことの一つは之である。例へば宮中において出會つた時には實に非常に丁寧で、おそれ入る場合がある、それで自分は此の紳士こそ將來親しく交際出來ると思つて、大によろこんで、その後一兩日中に名刺だけの訪問すると、中には返しの訪問すらしない人があり、又返しの訪問はしても、全くそれきりの人が澤山ある。歐洲においてなら此方から訪問を初めてするのではないが、日本に來て居るのだから、我を下くめて訪問してすら此の通りである。之は紳士の侮辱である。

敬遠主義の交際

敬して遠ざける交際は紳士は決して仕ない。それについて歐洲の紳士は日本人について次の如く批評した。

日本人と交際すると、よく感じられるのが、日本人は歐洲人に對して敬して遠ざける主義を取つて居るといふ事である。

始めは面白くめづらしいから一寸交際して見るが、段々といやになるといふ事を何人でもよく表はして居る。その實例が二つある例へば日本人と歐洲人とが相互の會を組織すると始めの間は日本人も出るが、後には日本人は餘り出ない、終には出席者が殆ど歐洲人ばかりの樣になつて了ふことがある。又例へば私人的に交際して居つて食事に招待すると、始めの間は來るが、後には會のやうに矢張り差支があるからと云つて十中八九は斷つて來る。

又日本人の家屋に訪問して見ると、入口に小さい西洋室がこしらへてあつて、西洋人が訪問するとその室に通してもてなす、奥にはおそろしい立派な日本室があつても、そこへは西洋人は通さない。

日本人が歐洲人を好まないといふ事はいろ〳〵の點でわかる。

（著者曰、此の應接間の批評は頗るよく當つて居るが、應接間については日本人で誤解をして居る人が多い。日本人中には奥へ招じたいと思つても、西洋室でなくては西洋人に惡いと思つてわざと西洋室で歸らせて了ふ人がある。西洋人には主人の此の心はわからないから、それで惡くとるのも無理はない）

約束を輕くする事

約束といふ事は事件そのものは小さいにしても非常に大切なこと

と西洋ではなつて居る。然るに日本人は約束をすぐにして了ふ、而してそれを履行しない、この點については西洋人は日本人の性質について少からずおどろいて居る。

歐洲ではなるべく少く約束して、なるべく多く實行せよと子供の時から敎へ、たとへ如何なる微細な內容の事件にしても、事件その事に關係がなく、約束その事が重大な事件である。然るに日本人は事實が小さい事價値の少いことであると、約束その事もすぐに輕んじて了ふ。之は社會の秩序を維持する爲めに甚だよろしくない。歐洲では事件の內容の大小と約束とは何も關係がない。

商人についても約束に少からず歐洲人はおどろく。何時何日に參るとか送るとかいふ約束をする、それを待つて居ると來ないとか又

届かないとかいふ場合が非常に多い。

それでよく調べて見ると、何もわざと來ないのでもない、又わざと注文の物をこしらへないのでもない、實際出來て居ない、實際出來ないのである。つまり約束通りに事を進行させてないのである。

だから日本人の其の場合を考へて見ると、約束をやぶるのは萬止むを得ぬ事で約束を破らなければならぬ樣になつて居るのである。して見ると始めの約束は何も考へずにつまり成算なしに結んだのである。即ち日本人は何も考へずに約束をするものである。

日本人の『宜しい承知しました』といふ言葉は全く信じられない、でたらめの言葉である、（著者曰、約束については此の批評は全くよく中つて居る、著者も甚だ恥づる事が多いのである。歐洲人は又次

の如く云ふ。）

歐洲の紳士で日本に居る者で多くの人が支那の商人をつかひ又横濱に於て使用人にも支那人を傭ふ、支那人は約束が大變に堅いからそれで關係して居るのに安心であり信じて居られる。

右は日本人に對する西洋人の批評である。日本人とても約束を大切と思はぬのではないが、勢ひ敗らなければならぬ樣になつて來るのである。斯うなるのは何故かと云ふと、前記の如く確實な成算なしに約束するからである。故に今後我々は慥な成算なしに約束と云ふ事はしない事とする必要がある。

日本人は兎に角約束するといふ言葉を談話中にいくらも使ふ、之が卽ち成算の立たざる、曖昧の證據である。

お禮をすると云ふこと

何か感謝の意を表すべき場合、紳士に向つて物で禮をするといふ事を公然と口にしては紳士に對する大な侮辱である。此の事について日本人は歐洲の紳士を折々蔑辱する事がある。其の一つは紳士に向つて、あなた是々の事をして下されば、貴下に是々のお禮をしますと斯う云ふ。之は歐洲の紳士の多大の不愉快を感ずる事である。歐洲の紳士は個人としては是々の報酬があるから是々の事をすると云ふのは大なる不快の事で、爲すべき事であれば、報酬を考へては可けないとして居る、又紳士に向つて是々を與へるから是々をしようと云ふのは多大の侮辱である、然るに日本人は時々此の事を平氣で云ふ。（尤も米國人間にありては此の事は左程惡い事ではない。）

知人を利用して商賣すること

親友になればよいが、知人として交際して居る時代に、その人を利用して利益を得ることは紳士は爲ては行けない。

日本の上等社會で出會ふ人に妙に知人を利用して商賣をしたがる人がある。例へば「私の友人に斯ういふ物を賣りたい者がある、品は日本にも二つとない物だ、貴下の知人に買ふ人がありますまいか」と斯う尋ねる人がある。而して又賣りたいから紹介して呉れと云ふ人がまゝある。紳士は斯ういふことを何となしに不愉快に感ずる。

身分を尋ねること

交際が進まなければ身分や家庭の事を聞いたりするものでない。

然るに日本人中には一寸一面識に過ぎない人が、すぐに込み入つて身分を聞く人がある。例へば何を爲て居るの、お國は何處ですか、何處にお住居ですか、何歳ですか、奥さんは居らつしやいますか、等と恰も巡査が戸籍でも調べる樣に聞く人がある。ろくに交際もしない人がこんな事を聞くのは甚だ失禮である。殊に驚くべきは、商店へ何か買ひに入ると、店の者に斯ういふ事を聞く者がある、之は歐洲で多大の失禮である。

寫眞の交換の早きこと

之は敢へて不作法といふ事では無いから、こゝに書くのも如何かと思はれるが、併し一寸注意すべきことであるから、此處に書いて置くが、日本の婦人は非常に寫眞をすく人間である、而して一二度

交際するとすぐに寫眞をくれと云ふ人が隨分多い。しばらく別れる時か、又は歸國する時かに、通例寫眞を交換するのが習慣である。又然うでなければ長く交際して居る間に、新に寫眞を取つたからと云つて一枚分ち與へる事もある。交際の日まだ淺く、且つ時々會合する際には寫眞をもらふ必要はない、又少し變な心持がする。序に云ふが日本婦人は大變に寫眞好きである勢か、日本では寫眞の技術は大變に進歩して、非常によい寫眞が出來る。日本の第一流の寫眞屋の如き、よい技術をもつて居る寫眞師は歐洲にでも然う澤山はな

い。

第八章　訪問と招待

第一項　訪問と招待の價値

時間と招待は、交際を發展させる爲めと、又發展した交際を維持させる爲めとに誠に必要なことである。訪問と招待とを繰り返さなければ、親密な交際といふ事は成り立たず、又維持されない。ことに國際關係の親善を計らんと欲すれば、訪問を怠り、招待を等閑に附するわけに行かない。交際官の訪問及び招待の如きは實に國民の消長に關係する。

例へば米國民の感情に何となく日本人を排斥する傾きを生じたのは、星亨が公使をして居る時に室に引込んで居つて、一向交際も訪

問もしなかつたので、米國の上下の人が、何となく日本人に對して云ふべからざる不快を感ずるに至り更に又小村壽太郎が日露の講和談判委員として行つた時に、交際をつとめて避け、新聞記者の面會謝絶を行つたのが原因の一をなして居る。（新渡部博士の意見）

此の如く、訪問及び招待といふ事は交際上に精神の疎通を計る極めて重大なる形式である。

訪問

面會の訪問は通常前に時間と日とを約束しておく、突然に訪問して面會を求めるのは善くない。訪問は一寸した事であるが、いろいろ注意すべき事がある。始めての訪問の如きは、外套を取らないで、十分か十五分位で歸るのが一般の風であるが、主人より外套を取れ

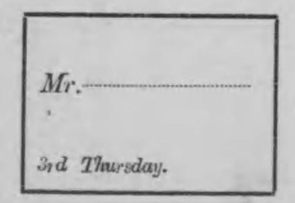
と云はれば外套を取つて三十分も談話するのもよい。兎に角初對面の時には決して長居をするものでない。

茶やコーヒは普通の訪問には出さない、併し夏の暑い、人の喉がかわく樣な時には炭酸水、ウキスキーソーダ、又はリモナデ等の飲物を出すのもよい。

すべて親友にならない間は、訪問に長談義をして居ることはよくない、尤も主人の樣子を見て、主人も好んで迎へる樣であれば、其の時の心持で多少長く居るもよい。

訪問日

婦人で訪問日のある人は大概名刺の左の下に書いておく。（下圖の如く）



上流の婦人は大概訪問日といふ日が定めてある、この日には知人は面會を求めて談話する方がよい。尤も訪問日を定めるには、大きい廣い應接間のある家でなければ行けない。

訪問の遲刻

前以て打あはせておいて訪問する時には十分と違はない樣に行かなければ行けない、十五分以上も時を早めるか又は遲れるかすれば、失禮である。日本人は約束の時より遲刻した時に何か妙な口實を澤山に云ふ、甚だしい人は頭が痛かつた、齒が痛かつた、腹が惡かつた等と、其他種々の口實を一々云ふ、よし其が事實であつても、それを一々云ふのは行けない、萬止むを得ざる理由でと云つておけばよい。

訪問の時刻

偶然に訪問して而して一寸面會しようと思ふには、先方の都合のよい時間を考へる必要がある。日本人の如く、朝早くより押しかけて、甚だしきは寐込におしかけて、面會を求むる如きは多大の不作法である。

歐洲人でも朝早おきもあれば、午前十時迄寐る人もある、予の親しい今の法科の雇教師のウエンチヒ君の如きは、ハルレ大學では朝の七時より講義を開いたといふ位で日本人よりも早起きであり、又予の懇意な某外人は十時位迄は床に居る、それだから人によつて、人に面會するに都合のよい時間は違ふ。それで午前は先づ一般に一寸した訪問には適しないが、十一時から一時迄は勤務のない人なら

よい。

歐洲人は一時に食事をするのが通常であるから、此の前後は適しない、又晩は七時頃に食事で、而して晩餐は一時間位かゝるから、又その前後は適しない、故に此の間をよく考へる必要がある。

丁度食事して居るやうな頃には決して訪問しては行けない。

待ぶせをせぬ事

之は日本人間にのみあつて歐洲人に先づない事であるが、訪問して先方が面會の都合がわるければ、暇がありますから何時迄でも待つて居りますと斯ういふのは、歐洲の紳士に一種いふべからざる苦痛を感じさせる事である。

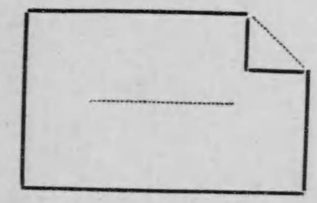
この頃東京を去つた某歐洲紳士が或る日新聞記者の訪問をうけた。

すると一寸差しつかへがあつて面會を斷つた、するとその記者は二時間以上待ちぶせして居つて、その紳士が歸らんとして出口に現はれて、その記者が待つて居つたのを見て非常に驚いた、歸つて了つたと思つた人が待つて居つたと解つたので一種いふべからざる、今迄に經驗しない苦痛を感じたと云つて予に話したことがある。別項の無駄の話の如く、訪問して、而して先方に一種の苦痛を與へるのは甚だ惡い事としてある。

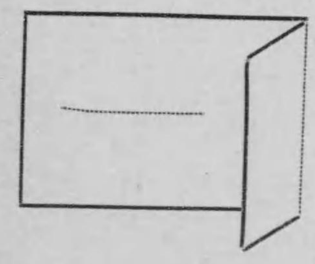
訪問と名刺

訪問には名刺をおいて歸る事と、本人に面會する事とある。例へば何處かで一度面會して、その後その人と交際しようと思ふ時には、名を忘れられない樣に、又は敬意を表する爲めに、近い日の中に一

寸名刺をおいて歸る。その時には名刺の右の端を一寸折り曲げる、此の折り曲げるのはすべて自身で來たといふ記號である。折るのは通常右の端を内に折る。折り方は左の二種いづれでもよい。訪問の性質で折り方が異るなどいふ事はない。

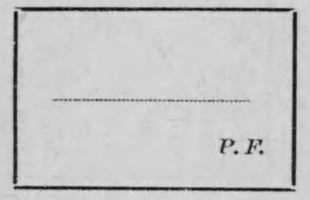


名刺のみをおいて來る場合に、たゞ招待の答禮であれば、右の如

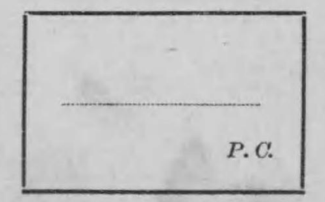


く名刺を折つて別に何も書かないが、其他種々の場合次の如く書く、之は佛語を用ゐるのが歐洲一般の風で又草書で書くのが習慣である。

目出度い時に慶賀の爲め



悔みの時



日本の名刺は縦長いから、日本人間に日本語を以て書く場合には左の如く姓名の右の方又は姓名の上の方に書くがよい。日本人間に此の佛國語を用ゐるのは宜しくない。日本人間には矢張簡單に慶賀、御悔み、御暇乞ひ、感謝と書く方がよい。但し紹介の場合には日本

暇乞ひの時

P. P. C.

紹介する時

P. P.

謝意を表する時

P. R.

では自分の名の左か右に紹介と書く方がよい。

慶賀

御暇乞

答禮と名刺

招待者が夫婦二人なる時に、招待されたる者は答禮に來つて二枚をおく、又夫婦共に招待をうけたる時には、夫婦各自の名刺をおく、又は夫の方が丁寧にすれば二枚をおく。此の招待の答禮は翌日すぐに行くが一番よい、萬一多忙で止むを得なければ一週間の間に行く。決して他人に名刺をもたせて遣つては行けない。

婦人新着の訪問

婦人が新に着すれば、英國の風では、土地の婦人が此の新着の婦人を先づ訪問する、歐洲大陸では新着の婦人が先づ其の土地の婦人を訪問する。日本では歐洲大陸の風習を採用する方が國民の從來の風習に適する。

婦人の訪問と帽子

婦人の一寸した訪問は帽子を取らない、晝に茶の爲めに行つても、主人の方から取れと云はなければ、取るものでない、又夜會等には絹をかぶり帽子なしに行く。

自己主義の訪問

之は日本人の往々する事で、歐洲紳士の頗る不快を感ずる訪問であるから、一寸此處に注意して置くが、日本人は突然面會を求むる訪問をして、而して頻りに何か物事を尋ねる、何も惡意でするのではあるまいが、何かに關する知識を得ようとする爲めか、又は事情を聞きたい爲めか、要するに自分の利益の爲めに訪問して、先方を妨げて居るのである。之は紳士の決してせざる事である。此の如く純然たる自分の利益の爲めに人に面會したければ、前に特に手紙を以て許しを得なければ行けない。

不得要領の訪問

又日本人中には右に反して何の爲めに訪問したか分らない事がある。只娯樂の爲めに談話しようと思つて訪問するのらしいが、歐洲の紳士は然う云ふ訪問をして人を妨げる事を大に失禮として居る。

日本人の訪問の少きこと

之も歐洲紳士の日本紳士に對する批評であるが、日本人は訪問する事が餘りに少い。日本に來て、其暫くの間、未だ住屋も整頓せぬ頃には訪問を受けるが、住屋が愈〻整頓して、之から頻りに訪問して欲しいと思ふ傾になると訪問する人が極めて少く、又今迄來た人でもうばつたりと來なくなる人がある。其れで歐洲人はどうして も日本人の好む所で無いと斯う思ふ、雜居的に住して居つても、矢張居留地に居るのと同一である、と斯ういふ批評を折々聞くから、念の爲めに此處に書いて置く。外交に關係がある人のみでない、一般の人に此の點に就て大に反省を乞ふのである。

戸をあける事

訪問客が歸る時には、出口迄幾つの戸があつても、主人が送つて行つて、主人自ら總ての戸を明け、客自身に戸を開けさせては失禮である。萬一自身が送つて行かれない場合には、家來を呼んで、主人のする樣にさせる。

待たせる時

訪問客があつた時に、急に手ばなしかねる事があつて、十分十五分と待たせ無ければならぬ場合は、必ず何卒暫時お待を願ふ旨を傳へる。決して何もいはずに客を待たする事は歐洲の紳士は決してしない。

取次人の不作法

其一

之は紳士淑女自身に就てではないが、併しその玄關に置いて見る事であるから一寸此處に書入れる。日本の家庭に訪問して取次人に名刺を渡すと、取次人は名刺を非常に念を入れて讀まうとする者が澤山ある。之は西洋の紳士に對して失禮である、予は先年某公使と共に日本の最高の名家を尋ねた公使は只名刺だけを置いて歸るので、馬車から出て玄關に行くと袴を付けた若い學生の樣な取次人が出て來て公使の名刺を受取つて、長い時を費して讀まうとして居つたので、公使はこまつた事があつた。取次人は盆の上へ名刺を受取つて丁寧に挨拶するより外に言葉かけたり、又名刺を讀まうとしたりしては行けない。

其二

之も殘念ながら日本人間にのみある事だが訪問の際に取次人が出て來て、障子を少しあけて、身體を全く隱して置いて、顏だけ出して、而も窺ひ見ると云ふ樣な風で、取次人が客に對する、之は甚だ不作法で客の甚不愉快を感ずる事である。恰も惡人でもあるかの如き待遇である。

歐洲紳士の家庭では訪問者は、外に立たせて置いては行けない事としてある、よし面會し得ざるにせよ、戸を開けて家に入れる、最も丁寧なのは、應接間に入れて、而して其れから主人に取り次ぐ。勿論主人の不在な時は家に入れる必要はない。

第二項　招待

招待狀

食事に招待しようと思ふ時には、最も少くとも一週間前、或は二週間前位に招待狀を發するがよい、親友でない限りは、一兩日前に招待狀を發する樣な切迫した事は甚だ不作法である。

招待狀は必ず手紙にて成るべく丁寧に書き、日と時間とを必ず書き入れ、又當日の服裝に望みのある時には、其服裝も書き、又晝餐晩餐等の爲めには必ず貴答を乞ふ旨をも書き入れておく、尤も立食の如き、必ずしも返事を要せざる時には貴答を乞ふ旨を書かなくてもよい。

招待者が主人のみなれば、主人のみの名を記き、若し夫婦にて招待しようと思へば夫婦の名を書いて置く。

夫婦は大概一緒に招待するが習慣である。

招待狀は各國民自己の國語を用ゐる方がよい。故に日本人も公式には日本語を用ゐる方がよい。

返事

招待狀を受けたる時は、返事は成る可き早く出すのが禮である。

招待日に接近してから漸く返事を出す如きは大變に不作法である。

若し當日差支がありて、招待に應じ難き場合には、理由を丁寧に書いて返事を出すか、又は訪問して謝意を表し且つ理由を述べて斷る。手紙で斷つた場合には丁寧にすれば、其の後一度訪問する方がよい。

招待の精神

招待の精神は主客相互に一晩の娯樂を盡す事、或は主客相互に胸中を披瀝するのにある。多數の客を同時に招待するのは、目的が前者にあり、少數の人を招待するのは目的が後者一人にある。一人又は二人招待するのは、最大の親愛を意味するから、自分一人が招待される時などには歐洲の紳士は相互に全くよく打解けた眞の親友になる。

招待時間に早く着くこと、遲れること

招待の時間は餘程正しく守らなければ主人を困らせる。日本人中には招待の時間より一時間も早く行く人がある、例へば一時の食事に十二時一寸過ぎに行く人がある。先年予がオランダ公使について居つた時に十二時少し過ぎに二人が話をして居つたら、一時の招待の客が來て、非常に驚いた、未だ歐洲でそんな事を知らないと云つて大にあわてゝ二階にかけ上つた。餘り早くては主人はまだ用意が出來てなくて大にまごつくのである。招待の時は五分十分より前に付く可からず、又十五分より遲くれては行けない。

萬一病氣の時

招待を受けて行くと云ふ約束をして置いて、而して當日になつて病氣でどうしても行かれない時には其の旨を通じて斷るがよいが、少しの病氣で行かれたら行く方がよい、而して食物は何もたべなくても、皿の來るごとに會釋して斷ればよい。食しられないから出席しないと云ふのは禮節に缺けて居る。歐洲では食事よりも寧ろ面會して談話する事が大切である。

ホテルに招待

日本人が、歐洲紳士をホテルに招待する事について、歐洲紳士は次の如く云ふ。

歐洲でも此頃は大勢の客で家で設備をしかねる場合にホテルに招待する事が行はれるが併し一人二人三人の客で、家で出來るのにホテルに招く事はしない。然るに日本の紳士が、どうかすると、否或る人はきまつて歐洲人の客をホテルに招待して晩餐會を催す。若しその人が家庭がないとか家が狹いとか、料理人がないとかいふのなら、それは道理がある、けれども立派な家があり、中には堂々たる西洋風の建築に住んで居る人が、客をホテルに招待する事のあるのは甚だ以て不愉快である。つまり吾人を敬して遠ざける主義と見える、然らずんば何も知らざる愚な行爲である、尤も歐洲でも客を料理店に招く事があるが、併しそれは大勢の客で、自宅で設備が出來ない場合である。

ホテルに招待されても何の趣味があるものか、歐洲紳士は寧ろ招待の多きにこまつて居る位である。何も食事その事に招待される必要はない。日本人がホテルに招待するのは、食はせるから來いといふ樣な風だ。

尤も何か特別なデリカツセ（珍品）の所ならよいが、一般普通の料理屋に招待するのは甚だ禮節に缺けて居る。

ただ飲食の招待

招待の目的は打ちとけた精神を互に披瀝するのが目的であるから、

飲食を目的としては甚だ禮節に缺けて居る、若し飲食をのみ目的とすれば、下等社會の待遇である、然るに日本人が招待する眞意は何處にあるか、歐洲の紳士には解らない事が多い。日本人の招待は多くは飲食させる爲めの招待の樣である。歐洲の紳士は何も飲食の爲めに招待される必要はなく、且つ飲食の爲めにのみ招待しては歐洲紳士は非常に退屈でたまらぬ。實に何等の興味もない殺風景な事が頗る多い。第一花が少い、音樂がない又目を喜ばせる物がない又最も興味を添る主婦がない。又興味ある談話に乏しい。

歐洲では老人が招待人中にあれば、若い綺麗な女をその近くに配するのが通例であるが、客の男女の配合について日本には一向に考へない。晩餐の招待の如きは、食事も勿論大切であるが、食後の興

味が更に大切である。招待をしたからには、客が、面白かつたといふ心で歸る樣に爲すべきだ。只滿腹したのみでは招待の半の意味を達したのみである。(著者曰、日本人が食後間もなく歸る習慣があるのは招待の目的は食事であるかの如き心持で居るのが原因だ。)

晩餐會に歸りの早いこと

晩餐會に日本人を招待すると、誠に何の興味もない、食事がすむと一服してから、すぐに歸つて了つて、談話に花がさき實がなる事が先づない、此の事は歐米人で日本に滯在して居るもの、又日本に旅行して、自分はホテルに居つて日本人を招待するものによく認める事である。歐洲の紳士は晩餐會に招待された場合には、ことに自分一人の場合は更に特別であるが、大宴會でない以上は、食後打と

けて談話し互に胸襟をひらいて相語るのが作法である、然るに日本人は恰も食事が目的であるかの如くに來て、すぐに歸つて了ふ。

著者曰く、日本人が歐洲人の此の習慣をよく知らないので、時に殘念な事がある。例へば往年海江田子爵がオーストリア國に行つて、有名なスタイン氏に就て勉強して居られた。その時の衆議院の副議長は大なる日本好きの人で、是非日本人とオーストリア國とを接近させたいと思つた、それでスタイン氏の招待で海江田子爵を招待して大に談しようと思つて或る晩に海江田子爵を招待した、すると晩餐後に子爵はすぐに歸つて了つた、それで副議長は大におどろいて、多分自分を海江田子爵が好かれないのでそれで早く歸つて了つたのであらうと思つて、大に殘念がつて、その後スタイン氏にその事を

話した。

それでスタイン氏は又海江田子爵に何故閣下はあの晩早く歸つて了つたか、副議長は大に深く談しやうと思つたのにと云つたら、子爵はそんな事とは知らなかつた。長く居ては失禮だと思ふから歸つたと答へた。風習を知らなければ實に斯ういふ殘念な事がある。

明治四十五年の初夏の頃であつた、新任の大使が某協會員全部を招待した、その席には日本の最高の元老が居つた、食事が濟むや否や、この元老こそ〳〵と歸つて了つた。歐洲紳士の習慣では此の如きことは實に失禮なことである。新任の大使で日本人についてまだ何も餘り知らないから、頗る變に感じた樣であつた。

日本の外交の發展せざるも故ある哉である。

第九章　汽車と旅館

第一項　汽車中

歐洲の紳士が外出して最も謹慎深いのが、汽車、旅館、劇場等である、然るに日本人の汽車中における傍若無人の不作法は、歐洲紳士の最もおどろく事である。歐洲人は日本人の家庭の實際生活の有樣を窺ふ機會がないから、それで汽車中において日本人の生活を最も注意して觀察するのである。然るに日本人は家庭におけるよりも更に一層の不作法をやるのは甚だ殘念である。

聲高き談話

汽車中において他人の居るにも關はらず聲高に談話するといふ事は最も不作法なことである。紳士は他人に聞えない樣に話をする。日本人で歐洲に多年居つて可なりよく外國語も出來、風俗習慣を知つて居る人でも、汽車の中で一向構はず、大聲を發して談話して居る、又大音を以てカラ〳〵と笑ふ。他人の妨害になることに氣がつかないか。

或る日本の世界に名高い醫者と、予と獨逸の海軍武官と一つの箱で、新橋から下の關行で出た。すると此の名醫に相對して居る同行の醫者と、右に書いてある通りの不作法をやるので、此の武官は實におどろいた事がある。

又汽車の中で何か歌ふ人が折にある、尤も談話よりは小聲ではあるが、併し之も決して歐洲紳士のしないことである。

又本を音讀する人がある、之も全然よくない事だ。

足をあらはすこと

日本服を着て居る人が、暑中であると、足の大部分を表はして坐つて居る人がある。中にはわざとに表はして而して足を團扇や扇子であふいで居る人がある。中には陰部迄も出して居る人がある。斯ういふ事があると婦人はほとんど困つて了ふ。若し歐洲で斯ういふ事があれば婦人は勿論その席に居ない、男子でも大におこる。けれども歐洲紳士が日本に居るので萬事遠慮して居るのであるから、不愉快を堪忍して居るのである。

啖とつはをはくこと

日本の汽車の中にある灰吹きの上に果物の皮や紙屑など不潔なものが一ぱいになつて居つて、又その上へ啖やつばを吐く人がある。何といふ不潔な事をする人間であるかと歐洲紳士は實におどろくの外はない。

荷物の大なること

歐洲人は我々日本人を批評して斯ういふ。

日本人の旅行は非常に簡略であると聞いて居つたが、それは下等以下の社會の人で、高等社會の人は、荷物が整頓されてなく、馬鹿に大きい荷物と、その他いろ〳〵な小さいものを澤山に汽車にもつてはいる。荷物の不整頓なること實におどろく。それだから汽車の室内は客車と荷物車と一つとなつて居る樣に見える。

ことに驚くべきことは、恐ろしい大きな袋をもつてはいつて、さ

も自分の客車でゞもあるかの如く大きな場所を取つて、他人の場所をせばめる事を何とも思はない事である。是等の事は歐洲人の最も賤しめる事である。

汽車中の藝者

數人の藝者が旅行するのに一緒になることがある。日本の藝者なるものは下等な人間であるといふ事が、汽車中において最もよく露はれる、衣服その他みな上等のものであり、愛らしい人間ではあるけれども、傍若無人の笑ひ方をする、笑ふのは藝者の商賣であらうけれども、品のよい綺麗な笑ひをせずに、醜惡極まる笑方をするのは、日本の藝者の惡い缺點である、

歐洲にも藝者の樣なものがある。高等社會のものを相手にする樣なものであれば、生活から行儀作法に至る迄貴婦人の態度であるが、日本の藝者は下等なおもちやの樣なものである。

窓を無暗にあけること

歐洲人は窓からツーッとはいる風を大變におそれる、然るに日本人は隣席の人がこまることを一向かまはずに突然窓をあける。

汽車中の婦人

日本男子は汽車中において驚くべき不行儀であるにも關はらず、婦人は概して大に行儀がよい、婦人の不作法なことは先づ見ないが、若し强て擧げれば、婦人が他人の前で無暗に化粧することである。一寸髮をくしけづる位なことはよいが、顏に白粉をつける、紅をさすなどするのは少し目に立たざるを得ない。

日本人は汽車にのると全く不作法を遣る、尤も東海道に汽車がついた頃から見ると、今日は幾分かよくなつた、昔は澤山に食物を汽車の中へもち込んで、汽車が動き始めると酒宴を始めた人が少くはなかつた。

西洋人が日本人の生活を觀察するのに汽車中が最も便利である。此の如くよく近よる場合は少いのである。日本人が西洋人から觀察されるとも知らずして汽車中で不作法を演ずるのは甚だ馬鹿なことである、日本人は東洋人種の特色を最もよく汽車中で發揮して居ると批評されて居る。

汽車中のごみ

之は人の事ではない、汽車の事であるから禮節の事の書の中に書くのも如何かと思はれるが、序だから一寸こゝに書き入れる。

日本の汽車中には非常に塵埃が多い、つまり掃除の仕方が悪いからであらう、と斯ういふ歐洲人がある。歐洲では機械で塵埃を吸集させて、全く清潔にして了ふが、日本では野蠻的な掃除をするから、實際汽車中に非常に塵埃が多い。吾輩の懇意な某獨逸人は日本の汽車中には塵埃が非常に多いから長く居ると眼が悪くなるので、私は汽車で長い旅行は出來ないと云つた。

掃除の仕方がわるいから、それで大きな目に見える塵埃は外に出すことは出來るが、空氣中にある塵埃は、掃除のあとで又再び下におりるのである。之ははたきを掃除に使ふからである、汽車の如き高い窓のある所ではははたきは止めて了ふべきことである。

第二項　旅館内

旅館は紳士の最も謹慎して住んで居る所である。旅館に於ける最大の注意は他人の妨害とならざることである、即ち夜中に聲高くすること、深夜にベルを強く鳴らすこと、其の他すべて靜肅にすると云ふことが最も肝要である。

然るに日本の旅館を觀察すると、旅館に於ける禁物が悉く公然と行はれて居る。以下日本の旅館及び旅客に對する批評は歐洲紳士の日本旅館觀察の結果であるが、此の批評に依つて旅館に於ける禮節を知ることが出來るから、次に掲げる。

日本人の汽車中の不作法と相並んで、日本人の日本的旅館に於ける

る不作法も西洋人に却々有名なものである。汽車と旅宿とで日本人が不作法を遣ることを考へれば日本人は自分の家を飛び出すと所謂旅の耻は掻き棄ての諺に從つて不躾な人間となつて了ふのである。

旅宿の中でも最も日本人の不作法なことを遣るのは避暑避寒の地、溫泉地の樣な所である。尤もさう云ふ人は紳士ではあるまいが傍若無人の擧をやる人がある、例へば隣室に人が居るのに、男女打交つて酒を飲んで、ワイ〳〵と騷ぐ人があり、又は半身裸體になつて飲食をして居つて、而も戸障子を開け放しでやつて居る人がある。

旅宿人の他人を憚らざる行爲と一は旅館の設備が好くないのと其れ等の事が原因になつて、歐洲人が日本で旅行すると、殘念な事に思ふ一つは、即ち日本の旅館には容易に泊ることの出來ないことで

ある。

旅館自身の方

客室

西洋では自分の住居は自分の城廓と云ふ如く、旅館に居つても自分の室は自分の城廓である、然るに日本の旅宿は、一寸障子で遮つてあるのみで、自分が寝て居る前の障子に他人が立つて覗くことの出來るやうな、實に不安な場所である。殊に歐洲の高等社會の女子は日本の旅館に泊るのは餘程困難なことである。

湯殿

非常に困るのが湯殿である。京阪地方や、伊勢の第一流の宿屋であれば湯殿は却々立派なもので、非常に美的であるが、併し肝腎の

湯そのものが不潔である。其の不潔な湯の中へ入つて而して又別に洗ひ清める湯が無いので歐洲人は非常に困る。

而して湯殿を覗く人がある、之れは甚だ惡い。又女中や三助が戸を叩かずに、突然に開けて入ることが多い。之れも甚だ宜くない。

手洗ひ場所

歐洲の紳士は日本人の如く多く入浴はしないけれども、手を洗ふことは日本人よりも多い。夫れで旅宿に着くと先づ手を洗ひたい事が多いが、日本の宿屋には其の設備が無い。尤も宿屋に依つては共同的に使用する場所が出來て居る所もある。

便所

高等社會の者の出入する便所は絶對的に清潔でなければ成らぬ。

少し不潔だと云ふのは、最早既に行けない。日本の第一流の旅館であれば便所は不潔ではないが、臭いことが甚だしい、歐洲の如く水道便所でないから臭いのは勿論であるが、併しもつと頻繁に取り去ることにしたら、此の如く臭氣の甚だしい事はあるまい。

大聲に人を呼ぶこと

旅館自身の方にも静かにすると云ふことに就いて注意しない、日中にも屢々聞くが、夜中でも大きな聲で人を呼ぶことがある。是れは甚だ行けない。大きな聲は歐洲では堅く禁物である。女中などが二階と下とで大聲で互に話をすることがある。是れも甚だ悪い。

突然戸を開けること

日本の旅館に泊つて最も驚くべきことは、日に幾度となく突然戸を開けて入つて來ることである、朝まだき寐て居る時から入つて來る、是れは行けない。未だ寐て居る時には女中と雖も用事に入つては行けない。

大に騒々しいこと

一體に日本の旅館はドヤ〳〵と騒々しい。夜中と雖も何となく騒騒しい。歐洲の高等社會の旅館は如何に多くの人が入つて居つても静粛である。

旅客の方

他人の室をのぞくこと

尤も日本の建築は他人の室の前を通行することが出來るやうになつた場所が多い、それで自然と然うなるかも知らぬが、一は外國人

でめづらしい爲でもあらうが、一寸のぞいて見る。之は甚だよくない。一體に日本人は外國人をながめる習慣がつよい、勿論歐洲人でも然うであるか、併し日本人のその事が實に著しい。例へば外國人の後にぞろ〳〵と附いて歩くなどは、歐洲人にない事で又之を歐洲人は惡い事と教育して居る。

甚だ騷々しくすること

日本の建築は構造が惡から、音響がもれる爲めに一層騷々しく聞えるのであるが、併し一體に日本人は隣室の妨害となる事を構はずに大聲を發し、騷々しくする。ことに驚くべきは夜中女と共に酒宴を開き歌つたりする。歐洲の紳士の立場からは此の如き事は全く行けない事である。

朝の顔洗ひ

歐洲人の最も驚くことは、日本の旅館に於て朝顔を洗ふ場所のおそろしく騷々しい事である。騷々しいばかりではない、誰でもみな聞くに堪へざる醜音を發する。齒みがき楊子をつかつて、ゲー、グーと云ふ樣な恐るべき醜い音を立てる。之は實に驚くべき事である。朝の顔洗ひ場は嘔吐の戰場である。

著者曰、別の項目にも書いたが、日本人がうがひする音は非常に醜い。之はよろしく改むべき事である。日本人は胃が惡い勢か舌の上に不潔な物が朝ついて居る、それで之をかき落す爲めに舌を突き出して不快な恰も嘔吐するが如き音を立てるのである。齒みがき楊子に舌こきのあるものを大概の日本人は持つて居る、之に反して大

概の西洋人はもつて居らない、私の知つた歐洲人で舌こきと云ふものを説明しても解らない人があつた。

旅客の裸體

日本の旅客は旅館に於て夏は非常に裸になる。湯から上つて來る人は裸の人もあり、又帶をしないで、衣物を出し引つかけて恰も自宅に在るかの如き有樣の人が少くない。要するに日本人は旅館に於いて他人の前をはゞからぬ事をやる。

ねころぶこと

若し暑中の旅館又は溫泉場などに行つて見ると、日本人は何時でも非常に多くねころぶ人間であると云ふ事が解る。而も障子をあけた儘で彼の部屋にも此の部屋にもごろ〳〵と寐て居る、勿論西洋人

も安樂椅子があるが、さう何時でも安樂椅子に掛て居るのは、なまけ者の事である。青年壯年が無暗に横になるのは、甚だ不作法である。

以上の批評に依つて旅館に於いて注意すべき事が自ら推し得らるる、なほ其他二三點注意すべき事を次に書く。

階段を上下すること

旅館では階段を上下するのに、靴音の立たない樣に歩く。

夜中呼鈴をならす事

夜すでに寐しづまつて居る時に、呼鈴を强く長く押してボーイを呼ぶことはよくない。

設備の不完全を告げること

室内の設備に不足があり、或は敷物に煙草のやけ穴があるか、窓掛が馬鹿に古いとか云ふ事があつて、之は行けないと思ふ事があり、而もボーイが其の點に注意しなければ主人に之を告げて直させるのが紳士の禮節である。

敷物を損ぜぬこと

高等旅館は非常に高價な敷物が敷いてあるから、煙草の火で燒穴をこしらへない樣に注意する事が必要である。

第十章　禁物雜件

第一項　學生と學者

同級生の親好の薄きこと

日本の學校において特にいちじるしく目に立つは、同級生の親好の甚だうすき事である。歐洲では高等學校位迄の年齢の間は全級兄弟の樣で、又一生の間文通をする者が多く、又同級生として生活して居る間は、動靜について一々くはしく知つて居る。日本の學校では少數の者が一團體となつて交際して居り、その他の者とは全く他人の樣である。

隣席の者に物を貸さぬ事

之も日本の學生間に目に立つ事である、誰かゞ本か何かを忘れて來た時に、隣席の者が平氣で居る、歐洲の學校では隣席のものが本を忘れて來たと氣がつけば、直ぐに差し出して見せて遣る、教員が見せてやれと云はなければ見せてやらない樣な事は、多大な不作法な、且つ不親切な事である。

教員生徒共に切りめを忘れる

語學か何かその他或る書籍について勉强して居る時に、前回には何處迄遣つたかそれを忘れるのは、甚だ惡い事である。日本の學校ではこの事が甚だ多い。

教員が缺席せぬ事

學校の教員たるものは、病氣で醫者が許さない場合の外は、決して他の用事にて缺席しては行けない、足一本位の病氣で、教場で杖をつかなければ歩かれない樣な場合でも缺席すべきでない、然るに日本の先生なるものは私用の爲めに學校に缺席する事が餘りに多いのに、歐洲の學者は少からず驚く。

學者に突然と意見を尋ねぬ事

純然たる學者に對して何かの問題について意見を聞かうと思つて、たゞ普通の意味で招待又は會見して、而して突然と或る問題を出して而してその意見を聞くことは甚だ惡い。日本の學者は斯ういふ場合にも直ぐに出放題な考へをいくらでも、さも自慢らしく話すが、歐洲の學者は斯ういふ場合には決してうか〳〵と返事をしない、いまは何もわからない、お望みならば調べませうと斯う答へる。それ

は何故かといふと、返事すべく調べてない事を無暗に返事するのは、學問の爲めに反つて危く、學者はそんな事をするものでないと斯ういふ立場である。

學者の序文

日本の學者は如何なる本にでも稱贊の序文を書く、これは實におどろくべきことで、惡い本にでもよい序文を掲げる事は、學者が先に立つて讀者社會をあやまらせる事である。日本の著書の序文は非常にわるい芝居の非常によい看板のごときものである。

著者曰、我輩今日迄に丁度二人の學者の研究助手となつて、日本人の書いた本を非常に澤山讀んだ、其中には隨分ひどい著述に堂々たる學者が大なる稱贊の序文を書いて居るので西洋人から大にあきれた事がしば〳〵ある、或る數種の著書は予はすでに讀んで內容を知つて居るから、買ふに及ばないと云つたが、某々大家の序文があるので、予のいふ事を信用しない、そこで買つて來て讀んで聞かせるとおや〳〵といつて驚いて大に腹を立てることが澤山あつた。

日本の著書の序文は大に改むべきことであるから、本書に一枚費したのである、この批評は予が助手として付いた二人の學者から聞いた言葉である。

日本の學生の品格と不作法

歐洲大陸では專門學校以上の聽講者でなくて眞の學生中には准紳士と看做される者が多く又大學の眞の學生には實際の紳士がある。然るに日本の大學生の不作法なるには大に驚く。概して日本人は淸

潔好きであるといふに大學生中に驚くべき不潔な人があるのは如何云ふ理由か。

あくび、せのび

大學生の中には、教室で大きい口を開けてあくびをしたり教室でウーンと云つて手を肩の方へさし上げて延びる人がある。又大學生中には机の上で手を枕にする人がある。

教室で新聞

大學生は朝の時間の時には教授の這入つて來る迄にみな新聞をひろげて讀んで居る。之も歐洲では不作法である。

教室で唾

大學生中には教室に唾を吐く者がある。歐洲ことに獨逸の大學に

於ける教授は決して恁んな事を許さぬ。甚だしい者は講座の上へ上つて唾をする人がある。

風采

大學生は帽をあみだにかぶり手を懐に入てのそり〳〵と歩て居る。此風采は歐洲では勞働者中でも下等の者で職がなくて困つて居る者の態度である。

眼鏡

大學生中には眼鏡をかける者が餘りに多い。又、歐洲の學生は外出の時と人を訪問する時、ことに教授を訪問する時などには少し位眼のわるい人はなるべく掛ない樣にするのに、日本の學生は年が年中かけて居る。

教授への不敬

日本の學生は一體に教授に對して敬意を支拂はない。例へば教授が教室から出ようとする時に教授を出さずして、學生が遠慮なくどし〳〵と這入る。歐洲の大學生は決してさういふ事はしない。

第二項　劇場中

一般の話

日本の演劇の舞臺そのものは時に或は歐洲にても見能はざる如き美麗なことがあり、又おそるべき野蠻的なこともある。丁度さういう樣なもので、劇場内の觀客にも、實に行儀のよい文明的の人もあり、又甚だしく野蠻的な人もある。

午前早くから夜にかけて芝居を見て居る人間が日本には餘り多いので、歐洲人の立ち場から見て、時間の浪費の甚だしいのに、實におどろかざるを得ない。之は敢て行爲を云々するのではないが、日本人の生活があまりにノンキなのに歐洲人は一方ならず驚くのである。歐洲では斯の如く娯樂の爲めに時間を無視するのを馬鹿の甚だしい事として居る。

劇場内の衣服

獨逸では聯邦の小都會に行けば隨分よくないが、それでも大都會においては今は觀客の服裝はよほどよくなつて居る、その他英國、澳國、伊太利などにおいては觀客は劇場に入る時に非常に服裝に注意する、日本にも大に注意する人もあるが、又大に注意せざる人も

澤山ある。

日本で殊に目に立つのは、上等の席にブザマな服で看て居る人のあることである。例へば足は腿迄も出してあぐらをかいて居る人があり、腕をずつと表はして居る人もある。

又尤も不快を感ずるのは出方の殆ど腰までも、（尤ももゝ引ははいて居る）着物をまくつて、而して土間の桝の上をあるいて居る事である。

觀客の表情

日本の劇場にて最も多く歐洲人の目を引くものは觀客が芝居によつて深く感動して、其の感動をすぐに表はすことである。例へば日本人ほど多く劇場にて泣き且つ笑ふ人間はない。歐洲の紳士淑女はいかに深く感動しても、それを自分の顏には表はさない樣にして居る。聲高に笑ふ樣なことは不作法となつて居る。歐洲人が無暗に表情を自然にまかせると思うのは大な誤解である。

勿論歐洲にでも泣き且つ笑う人もあるが、それは矢張ぶしつけな人間である。たゞ歐洲と日本との區別は、日本ではそれが一般のことになつて居るといふだけである。

飲食の多きこと

又もつとも目に立つのは、劇場が料理屋に等しき樣な有樣であることだ。歐洲では若し何かの都合で空腹でも感じて菓子でもたべずに居られない樣な場合があれば、その時は人にわからずに食べられる樣なものを人に知れずに食べよといふのが敎へである。

然るに日本人はほとんど絶えず飲み且つ食して居る。又煙草も劇場ではひかへ目にするのに、日本人は絶えず煙草をのんで居る。

身動きの甚だしきこと

西洋では劇場においてはなるべく他人が劇その物に向けて居る注意をさまたげない樣にする事が公衆に對する禮である。それで自分が一寸身をうごかすにも注意をして、其身動きで他人の注意を動搖させない樣に氣をつける。然るに日本人は遠慮會釋なく身動きをする。此點について日本女子はまことに行儀はよいが男子は甚だ惡い。

子供をつれて行くこと

日本の劇場にはいつて特におどろく事は日本人の非常に澤山子供を劇場につれて行くことである。子供を愛する情はまことに結構ではあるが、併し子供を劇場につれて行くのは間違である。時に或は泣いて觀客全體をこまらせる事があり、又子供は芝居を見るまでに發達しては居らないから、子供に芝居を見せることは善いか惡いか解らない。歐洲では絶體に子供をつれて行かない。

紳士が劣等又は野蠻な劇を見る

日本の最高の劇場において非常に上等の劇が演ぜられるかと思ふと又忽ち非常に下等な又は非常に野蠻な芝居が演ぜられる。而して日本の紳士淑女はその劣等な又は野蠻的な芝居を面白がつて見て居る、之は紳士淑女に似合しからぬ事である。

著者曰、吾輩數年前某公使に就いて居つた時に、まだその時に歌

舞伎座が日本の最高の劇場であつた。右の批評はこの時分のことである。先年なくなつた市川團藏が久しぶりで東京へ歸つて來て歌舞伎座へ乘り込んで幡隨院の長兵衞をやつた。大森街道で多くの乞食の樣な駕籠かきの樣なものと戰つて切り殺す有樣におそるべき慘酷な事があつた、顏を切る又胴を切るといふ樣なすさまじい場合に、丁度歐洲の高等社會のものが見能はざるといふ場合に、日本人はどつと笑つて見て居るので、歐洲の紳士は日本人は實におそるべき事を好んで見る人間であると云つて、少からずおどろいた。歐洲の高等社會の者は、斯の如きものを見てどつと笑ひ聲を發するのがどうしてもその理由がわからないのである。

又二人袴の樣な劇を見て日本人は非常に面白がつて見てをるが、歐洲の紳士には餘りに幼稚な且つ露骨なもので見るに堪へないのである。すべて狂言といふものは多くは何も意味を解せずに見れば面白いが、少々高等の理性のあるものは、餘り甚だしい幼稚でとても見て居られないのである。

第三項　その他

音讀

日本人はよく他人の前にて音讀をする。之は全く行けない。汽車中にては特に多い。是は歐洲に全くない事である。

口の音を立てること

食事の時に口の音をさせるのは行けない事は食事の部に書いたが、

食事の時でなしに、談話中に口でチユと音をさせる人がある、之は甚だ不作法である。

著者曰、日本人は齒が悪い爲めか食事の時に齒に何かはさまつて居る、それを吸ひ出さうとして、チユといふ音を立てる者が折々ある、此の音を指して云ふのである。

本の紙をまくること

日本の紳士淑女は本の紙をまくるのに、指先に唾を附ける、西洋では下等社會の者しか然うはしない。

日本人は本の紙を折り曲げる、尤も悪い紙の本や雜誌ならよいが立派でしかも借りた本の紙を折る。之は悪い事である。

灰吹きと唾

煙草盆の灰吹の中に啖唾をすることは甚だ悪い、ことに人の前でするのは甚だしい事だ。

著者曰、之も西洋人の批評が尤である、昔の人は決してそんな不作法はしない、灰吹は綺麗な物としてある。唾や啖は必ず紙に取つたものである。敢へて西洋人ばかりでない、日本人と雖も禮儀の教育を受けたものは此の如きことを見て大に驚くであらう。

狀袋の名宛を窺ひ見る癖

日本人は他人に屬する手紙や葉書の名宛を一寸窺ひ見る癖がある、之は甚だ宜しくない。机の上にでもあると一寸それを讀んで見る。殊にそれの甚だしいのがボーイである。之を出して來いと云つて手紙を渡すと、ボーイは直ぐに其の上書きを眺める。之は甚だ失禮

である。一寸玄關の取次に名刺を渡すと讀まうとするものがあると同一である。

うがひの音の甚だしいこと

日本の某役所に囑托となつて居つた或る若い學者で、向で父は大なる或る製造會社の持主であつて、此の若い學者も立派な紳士である、此の人は斯う言つた、日本人が役所でうがひする有樣は甚だ不作法である、恰も嘔吐する如き風でゴロ〳〵と云つたり、アーと云つたり、實に傍若無人の有樣であると斯う云つた。之は尤の批評であるから一寸此處に掲げて置く。

旅館の章にも述べた如く、實際日本人の口を漱ぐ音は甚だしく、醜い。之は是非とも改めなければならぬ。予は折々今日迄に外國人

の寢室のその隣が應接間である、其處で其の主人が起きるのを待つて居つたことがある。水を流す音などは聞えるが、うがひする音などは決して聞えない。

あくびとくさみ

日本人はよく人の前で欠伸する、長い會や、又は役所になると、其の事がよく目に立つ、勿論何人でも身體の都合で時と場所とに關らず欠伸が出るのは當り前であるが、併し人に解らない樣にしなければ行けないのに、日本人は大に口をあけて、ハーといふ、之は甚だ不作法である。若し人に解るやうに欠伸をすれば、ご免下さいと挨拶をしなければ行けない。

又くさめも同樣で、之は解らない樣にする事は出來ないから、ハ

ンケチを口にあてゝ、成るべく小さい音を立てる樣にしなければ行けないのに、日本人は、ハークションと大な音を立てるのは甚だ不作法である。

門の出入の遲速

宮中又は其他貴顯紳士の邸内へ馬車にてはいる時に、日本人は門の近く迄來るとその速度をゆるめてそろ〳〵とはいるが、歐洲では全く別で、門前迄來ると一層速度をつよめて勢よくはいる。

日本の風は何も惡いのでもなく、不作法といふでもない、或は日本風の方がよいかも知らぬが、歐洲人は日本の樣にすると何だか氣がぬけて、弱々しくて面白くないのである。

戸を閉める

戸をしかと閉めないのは、歐洲では甚だ惡い事として非常にこれを忌むのである。

日本人は戸をしかと閉めない人間であるといふ事について、歐洲人間に頗る知れ渡つて居る、戸障子を半閉めにしたり、開き戸を半開きにしておく事は甚だ惡い事である。

ことに進行しつゝある汽車電車等の前の戸は嚴重に閉めるのが習慣となつて居る。(獨逸のベルリン市では電車の前の戸は開けない事になつて居る)

足の貧乏ゆすり

汽車や電車において足を貧乏ゆすりするのは、歐洲では精神病的のことで、多大の不作法であり、又歐洲の紳士はそういふ運動を見

れば精神をはげしく刺戟されて、ぢつとして居られない。立ち去らざるを得なくなる。

業務

日本人が業務に一生懸命にならない事は著しい事實である。役所に非常に澤山の人間が居るのは卽ち時間を十分利用して仕事をしない證據である。歐洲では業務をとる人は業務時間に茶をのみ新聞をよむといふ事は行けないこととしてある。

日本人が仕事を延ばすこと、之も歐洲人で日本にをる者の最もよく知つて居ることである。延ばしては又延ばし又延ばしする。歐洲における業務の秘訣といふのは、汝の不快を感ずる業務であれば、全力をそゝいで早くして了へといふのである。日本人は此の教を知らないから、何か少々困難な仕事に出會ふと、いつ果すかわからない位に延ばすのである。

著者曰、この批評は吾輩も常にうける事である。西洋人が全力をあげて何か困難な事をはじめると、朝の九時から夜の十時十一時迄もつゞけてやつて了ふ事がある、一は精神的一は身體の强壯なるのにもよる事と思つて、吾輩も一歩二歩讓つて居る。某紳士の評によれば日本の各分科大學なら三四人の事務官があれば、歐洲ならそれですむ所だと云つた。

會においては不知の人なき事

すべて何か或る會にはいれば、その會の會員は卽ち既に自分に紹介されてあるものと心得てよい、故に自分一人がさも淋しさうに他

人にわかれて、何も話さずに居るのはよくない、何處へでも行つて自分から名を云つて話しかけてよい、又一方では新しい人がはいれば、つとめて人に紹介する樣にもする。然るに日本人には、一向會員と親しまうとせずに、一人さびしさうに立つて居る人が大勢ある。之は歐洲紳士の甚だ善しとせざる事である。

老人に車を挽かせる事

予或る日某紳士と二人散歩した、本郷の方の坂にさしかゝると若い立派な洋服を着た人が車の上にいかめしく構へて居る、而して車挽を見るともう既に五十以上六十近でもあるかと思ふ樣なやせた小男である。だからやつとこせと車を引いて坂をのぼつて行く。この有樣を見て歐洲の紳士は我輩に語つて曰く、之歐洲の紳士の好まざることである、此の坂をのぼるのに、何故下りてやらないか、しかも自分は大に年若ではないか、弱き老人をいたはらざるは甚だ以て心得ぬことであると斯う云つた。

著者曰、歐洲の紳士は人力車にのるのにいつも一種の苦痛を感ずる、それは人間に牛馬の樣なことをさせるのにしのびないと云ふのである。有名なコエーペル博士は車屋に餘り走らせないと云ふのは矢張此の爲めである。

老人のふるまひ

歐洲の高等社會にては、老人になればなるほど若い時の經驗を考へるやら、又はいろ〳〵の趣味の養成によつて、自分を人に醜く感じさせない樣にする、第一動作と音聲と、及び容貌においても、なる

べく所謂老人の醜を發揮しない樣につとめる、それだから歐洲高等社會の老女は高齢になつても何となしに綺麗で且つ所謂老醜なるものがない、然るに日本人の老人中には、老人になるといよ〳〵益醜を遠慮なく發揮する人が多い之は甚だ不作法である。

手紙で來た事

手紙で來た事で、返事すべき事があれば矢張手紙で返事しなければ行けない、手紙を讀んで見て、殊にその人の私事に關係する樣を使に口づてに返事するのは多大の失禮である。

長い爪

之は支那と日本とにある事で、歐洲人は甚だ好まざる事である。支那人中には手の指殘らず爪を長くする者があり、又日本人中には小指の爪ばかり延ばす人があるが、西洋人の高等社會には全く適しない事である。爪と頭髪は必ず一定の時日に切らなければ行けない。

動作を取りつくろはぬ事

之は表情及び態度の項に記すべき事であるが、すべて人は容貌その他すべての動作を取りつくろつては行けない。例へば日本婦人の歩行は非常な内輪である、又日本男子のうちには、腕を外に張り出し眉をそびやかして、所謂わり歩きをする人がある、斯の如くつくろふと云ふ事は甚だ惡い。

歐洲人の立ち場から見れば日本婦人は非常に愛らしくはあるが、併し非常に多くの取りつくろひがある。例へば見たい物も見ぬ風をしたり、表情の自然の發展を抑へて、顔をかくしたり、又は云ふべ

き事も云はずに故意に默つて居るのは、歐洲の紳士の立場から見て一の不自然で、それに對しては一種苦痛の感がおこつて來る。動作は自然で抑壓もしなければ、又過大にもせず、而してすらりとした感を與へる樣にしなければならぬ。

（終）

大正二年五月七日印刷
大正二年五月廿日發行

定價七十錢

文明日常の禮節

著作者　前田不二三
發行者　東京市京橋區南紺屋町十二番地　增田義一
印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　笠間音次

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社
電話八七四、八七五、八七六、九八九
郵便振替貯金口座　三二六

不許複製

實踐女學校長　下田歌子先生著

好評嘖々八版

婦人禮法

上製箱入美本
定價壹圓五拾錢
郵税十二錢

禮は婦女淑德の根元なり。本書は下田先生が多年の研究を披瀝したるもの、禮法の理論より實際に至るまで一々叮嚀に説明せり。殊に四十八種の實演寫眞を挿入したれば恰も師に就くと同樣容易に習達するを得べし。婦人及家庭には欠くべからざる良書なるは勿論、男子も亦これによりて禮法を學ぶべき指針也。

▲婦人世界記者　高信峽水著

婦人と交際

菊版　定價六十錢
美本　郵税八錢

多年婦人界に近親したる著者がその見聞せし實際に基き交際の秘訣を述べたるものにして悉く實例。失敗あり滑稽あり笑話あり美談あり、しかも流暢にして趣味ある筆致、讀笑の間自ら交際の秘術を理解すべし。婦人家庭必備の最良書なり。

忽四版

廬川忠雄君著

應對談話法

十版　定價貳拾五錢郵税四錢
四六版　全一冊

如何にせば談話に巧妙なるを得るか、如何にせば他人に快感を與へうるか、初對面の人には如何に接すべきか、老人婦人先輩には如何に應對すべきか。本書は是等の疑問に對し、一々實際の場合をあげて、其の秘訣を説述せり、説明頗る平易にして且つ明快。

廬川忠雄君著

交際術修養

三版　定價壹圓　郵税八錢
菊版　全一冊

本書は交際に關するあらゆる事項に就き、東西名家の教訓を參酌し、實際の運用を説けるもの、例へば談話上の姿勢態度、流暢なる談話の鍛錬、愛嬌の表現法、他人を看破する法、食卓上の作法、下僚の取扱ひ方、紹介の方法、書簡の認め方、書齋應接室の設備法等に就き、極めて詳細懇切に記述せり。本書さへあれば如何なる交際場裡に出入するも差支なし。

園田孝吉氏序
波多野烏峰氏著

紳士と社交

三版　定價七拾錢郵税八錢
上製金文字入美本

本書は前編と後編とに別ち、前編には紳士の修養に就て、東西古今の實例を引き、各方面に瀾りて説述極めて委曲周匝。更に後編に於ては、社交術の運用をば一々實際の場合に就き叮嚀懇切に教示せり。卽ち服裝、訪問、會合、贈物等より化粧に至るまで、數十の項目に分ちて記述せり。凡そ世の紳士たらんとする者、社交の術に長ぜんとする者は、必ず一本を座右に供へざるべからず。本書は實に紳士の經典にして社交術の燈明臺也。

六大定期刊行物

實業之本發行社日業

▲實業講習錄▲毎月二回發行毎號二百餘頁▲一ヶ月(三冊)五十錢▲三ヶ月(六冊)一圓四十五錢▲六ヶ月(十二冊)二圓八十錢▲一ヶ年(二十四冊)五圓五十錢▼

▲實業之日本▲一冊十一錢郵税一錢▲毎月二回一日十五日發行年二回增刊▲半年分增刊郵税共一圓五十五錢(新年號ハ金拾錢增)▲一年分同三圓十錢▼

▲婦人世界▲一冊十五錢郵税一錢五厘▲毎月一回一日發行▲半年分增刊郵税共一圓五錢▲一年分同二圓五錢▼

▲日本少年▲一冊十錢郵税一錢▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵税共七十錢▲一年分一圓卅五錢▼

▲少女の友▲一冊十錢郵税一錢▲毎月一回一日發行春秋二回增刊▲半年分增刊郵税共七十錢▲一年分同一圓卅五錢▼

▲幼年の友▲一冊十錢郵税五厘▲毎月一回一日發行▲六冊郵税共五十八錢▲十二冊同一圓十錢▼

88
342

終